

百庚申の改修

大寺を歩く

現在、市内で「庚申講」を行っている集落は見られないようですが、地域に残る多くの「庚申塔」がかつて盛んだったことを伝えています。

「百庚申」とは、1カ所に多数の庚申塔を造立したもので「祈願のための供養は数が多いほど有効との信仰に基づく」とする研究者の見解があり、県内では東総から利根川、江戸川流域に分布すると報告されています。

市内の百庚申は筆者のこれまでの調査で4カ所が確認されています。このうち県道74号沿いの旭市との境界近く



大寺の百庚申

の大寺地区共同墓地付近にあるものは、2014(平成26)年に同地区の人たちにより保存改修工事が行われ「庚申塚保存改修落成之碑」が建てられています。中央に「青面金剛像」を浮彫りにした庚申塔、左右に3基ずつ「青面金剛」や「庚申」と刻まれた文字塔が並びます。中央の塔は1740(元文5)年4月に大寺村全体で造立しました。左右の塔は庚申年にあたる1800(寛政12)年と1860(万延元)年にまつられ、おそらく少人数の講中が建てたのでしょう。それらを囲むように「庚申」と刻まれた丸く細長い枕状の自然石(飯岡石)が隙間なく並べられ、百庚申となっています。

江戸時代に大寺村で造立された庚申塔は龍尾寺、長福寺、熊野神社境内でも見られ、「寺谷講中」「四右衛門坂講中」と刻まれているので集落ごとに講中が存在したのでしょうか。

このほか「大浦村惣講中」1737(元文2)年、「長岡村中」1740(元文5)年の百庚申も大寺村同様に村境近くの道路沿いに建てられており、道祖神の役割を果たしたのかも知れません。

市内に残る庚申塔は、道路改修などで移転や損傷したものはほとんどみられません。大寺区20数名による「百庚申の改修」で保存の大切さを再認識することができました。

(市文化財審議会委員・依知川雅一)